

VSE（ISO/IEC29110 規格） のすすめ

シニアコンサルタント

竹内 元子

Motoko Takeuchi
motoko-t@sra.co.jp

◆はじめに

2011 年 1 月に、比較的小さなソフトウェアを開発する小規模組織向け (Very Small Enterprises:VSE) のプロセス標準である ISO/IEC29110 (以下、VSE) が制定されました。この国際規格はソフトウェアライフサイクルのうち、ソフトウェア開発部分だけを取り上げ、**開発をする上で必要最低限のプロセスと入出力成果物**で定義されています。ですので、海外の一部の地域ではソフトウェア工学の一貫として教育の場で、また、小規模なソフトウェア開発現場で実際に使用され始めています。日本ではまだ十分に普及していないのが現状ですので、VSE がどのようなものかご紹介します。

◆規格制定の背景

なぜ必要最低限なのか？という点、もともとは小規模な企業 (enterprise) を対象に考えられていたからです。小規模な組織ではソフトウェアライフサイクルの一部の工程 (例えば、コーディングとテスト) を請け負って実施することが多いため、大きなプロジェクトや組織向けの開発モデルをそのまま適用するのが難しいという課題がありました。また、CMMI や ISO/IEC15504 などのプロセスモデルに基づく開発プロセスの改善活動を行うには専門的な人的リソースを必要とすることが多く、小規模組織では用意できないことが現実でした。

そこで、小規模組織のニーズに合わせ、必要最低限の内容で小規模組織が適用しやすいモデルを制定し、

かつ、専門的な知識がなくても適用しやすいようにガイドラインも併せた規格が制定されることになりました。

しかしながら、産業構造的には小規模企業が圧倒的な割合を占めているものの、大規模な企業でも、実プロジェクトの規模は小規模でソフトウェアライフサイクルの全てを実施することが少なく専門的なリソースに限られているという点では小規模企業とあまり差がないことから、小規模な企業 (enterprise) から企業、部門、プロジェクトまで範囲を広げた小規模な組織 (enterprises) を対象とした規格になりました。

◆規格の内容

規格で定義しているプロセスは、ソフトウェア実装 (Software Implementation : SI) とプロジェクト管理 (Project Management : PM) の 2 つだけです。これらのプロセスは、アクティビティからタスクへと詳細化されていきます。**プロセスだけでなくアクティビティやタスクレベルにおいても、VSE が必要な部分だけを定義している点が既存のプロセスモデルと異なる特徴**になります。

<ソフトウェア実装 (SI) プロセスを構成する 6 アクティビティ>

- ソフトウェア実装開始
- ソフトウェア要件分析
- ソフトウェア設計
- ソフトウェア構築
- ソフトウェア結合及びテスト
- 製品納入

<プロジェクト管理 (PM) プロセスを構成する 4 アクティビティ>

- プロジェクト計画立案
- プロジェクト計画実施
- プロジェクト評価及び制御
- プロジェクト終結

以下に、2つのプロセスの流れを示します。

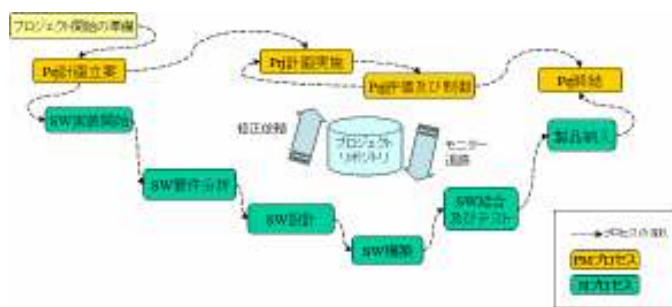


図1- VSE プロセスの流れ

図1の上側にあるプロジェクト管理プロセスは、プロジェクト計画の立案に始まり、プロジェクト計画の実施、プロジェクト実施状況の評価及び制御、プロジェクト終結手続きの実施という流れで、ソフトウェア実装プロセスを支援する最小限のプロジェクト管理系のアクティビティとなっています。さらにプロジェクト管理プロセスには、版管理や文書管理、品質管理の一部など、ソフトウェア開発作業に伴うアクティビティも取り込まれています。

また、「プロジェクト計画実施」や「プロジェクト評価及び制御」では、プロジェクト計画からの逸脱事項を発見し、その影響度を評価し、対策を実施し、結果を報告して記録するなどの一連の問題対応処理を定義しており、**プロジェクトマネジメント知識体系ガイド(PMBOK)の考え方を意識した構成**となっています。

一方、図1の下側にあるソフトウェア実装プロセスは、プロジェクト計画に従い、ソフトウェアの実装を開始し、要件分析、設計、構築（コーディング、単体テスト）、ソフトウェア結合及びテストを経て、顧客への製品納入で完結する**V字型実装モデルを構成**しています。これらのアクティビティは、ソフトウェアライフサイクルプロセス（SLCP 規格）で定義しているソフトウェア開発作業とほぼ同じで、どのようなソフトウェア開発作業でも基本とし

て実施される最低限のアクティビティとなっています。詳細な資料は、**VSE センター**(<http://www.vse.jp/>)から入手できますのでご利用ください。

◆ VSE 活用への期待

SRA で VSE を活用した簡易診断を社内適用したところ、コンパクトなプロセスモデルだからこそ、多様なプロジェクトを同じ切り口で**現場に負荷をかけることなく診断するの**に有効であることがわかりました。また、リーダーに成り立てのエンジニアを主に対象とした教育の一環としてこの規格を活用し始めています。活用方法としては、以下が考えられます。

- ソフトウェアプロセスの基礎を教える教育(再教育も含め)での利用
- 社内の標準的なプロセス整備への利用
- 標準プロセスをテラリングする際の指針として利用
- 異なる組織間での共通プロセスとして利用
- オフショア等発注先での適用プロセスへの利用
- 国際規格に基づく開発プロセスが要求される現場での利用
- プロジェクトの状況を把握するための診断ツールとして利用

今後は、教育・開発現場・PMO のそれぞれの中で VSE の特徴を活かした活用が促進されていくものと思われます。既存のプロセスモデルではしっくりこない経験がある方、軽量なモデルを探している方は、VSE を検討されてみてはいかがでしょうか。

◆◆◆◆ 編集部より ◆◆◆◆

GSLetterNeo をお読み頂きましてありがとうございます。バックナンバを SRA の Web サイトからダウンロードできますのでご利用ください。

来年も皆様のお役に立つ情報をコンパクトにまとめて提供していきますので、引き続きご愛読をよろしくお願いいたします。

夢を。

GSLetterNeo Vol. 41

2011 年 12 月 20 日発行

発行者 ●株式会社 SRA 産業第 1 事業部

編集者 ●土屋正人、柳田雅子、野島勇

バックナンバを公開しています ●<http://www.sra.co.jp/gsletter>

ご感想・お問い合わせはこちらへお願いします ●gsneo@sra.co.jp



株式会社SRA

〒171-8513 東京都豊島区南池袋 2-3-2-8

夢を。Yawaraka Innovation
やわらかいのべしょん